

## 更新講習会・講習内容の確認についての解答

平成 23 年 7 月 12・13 日

|      |  |    |  |
|------|--|----|--|
| 登録番号 |  | 氏名 |  |
|------|--|----|--|

1. 「診断と補強について」から、次のア～オの記述について正しいものには○、誤っているものには×を付けてください。

(ア) 一般診断での壁強さ倍率は  $9.8\text{kN/m}$  を、精密診断での壁基準耐力( $P_{w0}$ )は  $14\text{kN/m}$  を超えて診断に採用することはできない。 (○)

(イ) 耐震診断で採用される壁の強さ(一般診断での壁強さ倍率、精密診断での壁基準耐力)は、建築基準法上の壁倍率に  $1.96\text{kN/m}$  を乗じた値と等しくなる。 (×)

(ウ) 精密診断で採用される壁の剛性は、部材の変形角が  $1/200\text{rad}$  時の割線剛性を基準としている。 (○)

(エ) 偏心の大きな建物を補強する場合、剛心位置から見て重心側に耐震要素を配置することが望ましい。 (○)

(オ) 柱の折損は小壁付柱だけが生じるのではなく、2階建ての建物の1階での偏心が大きな場合は、通し柱で生じる場合もある。 (○)

2. 「Q&A と判定会からの留意点について」から、次のア～オの記述について正しいものには○、誤っているものには×を付けてください。

(ア) 耐力上有効な壁長さは、筋交い耐力壁で  $900\text{mm}$  以上、構造用合板耐力壁で  $600\text{mm}$  以上である。 (○)

(イ) 補強計画時に偏心の計算を4分割法と偏心率が共にOKになるように計画した。 (○)

- (ウ) 耐震診断では、建物本体と一体化した床組の 2 階バルコニーの面積に 0.4 を掛けた面積を 2 階床面積にプラスする。 (×)
- (エ) 耐震補強する耐力壁として、厚さ 12mm のコンパネに N50 釘を用いて @150mm 四周打ちで強固に取り付けた。 (×)
- (オ) 補強工事時に筋交い接合部を確認すると、I 型の平金物で補強されていたので、筋交いプレートは付けなかった。 (×)

3. 「補強の問題点と注意事項について」から、次のア～オの記述について正しいものには○、誤っているものには×を付けてください。

- (ア) 補強計画に於いての補強方法等は設計士の判断で行うので、施主へは後日に施工業者と協議を経てから報告説明を行い、契約書を交わした。 (×)
- (イ) 補強計画に際して、診断の資料（データ）等は存在しているが、再度現地調査を実施し再診断の後、補強計画を行った。 (○)
- (ウ) 補強設計者と施工者が異なっている場合、工事現場に補強実績のある施工者が施主に説明等を行っているので現場へ殆んど行かなかった。 (×)
- (エ) 診断時に小屋裏及び床下の調査は義務付けしていない事から、補強計画（設計）時に於いても、確認を重視する必要は無い。 (×)
- (オ) 片面筋交い補強の場合、取付方向に関しては壁の耐力は変わらないので、特に注意する必要は無い。 (×)